

---

# 最後には愛が勝つ？

蒼井 涼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後には愛が勝つ？

### 【Zコード】

N1304E

### 【作者名】

蒼井 涼

### 【あらすじ】

愛する人との結婚を目前にして、天国に拉致された男の悪戦苦闘物語です。

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

ああ、夢見てるんやな。

あるある。妙にリアルな感じ。

「マー、マー、何で、何で……」

ああ、これは由美の声やね。何か怒つてないか?  
まあ、夢ではよく怒られるよな。

「ほんまやで、大うそつきやー……ひ、まつちやん!

ひどすぎるわ!

ん? これは百合子さんか?

めずらしきなあ、百合子さんまで怒つてるや。

へへ、夢で浮氣でもしたか、俺。

いやいや、夢でも半殺しはめんやね。

「何で、先に死んじゃうんよ、私を見送るつて約束したやん、  
結婚するつて約束したやん……」

由美が泣いてる? 先に死ぬ? 俺が?

また縁起でもない夢やな。こり、わつと由美覚めた方がええね。  
で、由美が覚めた。はずだった……

いや、確かに由美が覚めたのだ。

しかし、そこに見えた光景はとんでもないものだった。

由美や由美の親友、百合子さんやらが俺を見下ろしてた。

その上、ついつい今まで夢の中で聞いてたことを泣きながら  
叫んでる。

えええ? まだ、由美が覚めてないのか?

と、思つた瞬間、体がふわっと浮いた。  
すると、さらとんでもない光景となつた。

なんと、そこには俺の葬式会場だったのだ。

俺が棺おけに横たわり、皆が最後のお別れというわけで俺を覗き込んでいる。

ぐるりと見回すと俺の遺影が花に包まれ、にやついている。

待て待て、俺、死んだのか？

いつ？ 何で？

こんなこと考へてる俺はなんなの？

幽体離脱？ いやちがうな。魂？

なんで？ なんで？

「ま、最初は誰でもそうです」

棺おけを取り囲む人の方向からではなく、真後ろから声が聞こえた。振り向くと、スーツを着たセールスマン風の初老の男性が立っていた。

いや、宙に浮いていた。

「だ、誰ですか。あなたは」

「お迎え担当です」

お迎え？ またわかりやすい。

「て、天国ですか？ 地獄ですか？」

つまらんことを尋ねる自分が情けない。

「行けば分かります。下界では一般的に天国と呼ばれてはいますがね。」

「何か微妙ですね」

「微妙ね・・下界では相変わらず言葉が乱れますねえ。なげかわしい。」

いい大人が使う表現ではありませんよ。直したほうがいい。」「す、すいません」

なんで誤まってるんだ。

「それより、俺は死んだのですか。」「

おれるおれる尋ねた。

「そうですよ」

「無碍もない。

「いつですか？なんですか？」

「覚えてないんですね。あなたは、建設中の建物から転落したんですね。

即死でした。楽だつたはずですよ。」

「転落？いつですか？」

「3日前です。あなたは、由美さんと会う約束をしていた。  
いよいよ、結婚を間近に控え、新居に会う家具などを見に行く予定だつたのです。

ところが、急に入つた連絡で新築ホテルの現場に寄つたあなたは事故に

合つたというわけです。」

「由美は・・・」

「ずっとあなたから連絡がないため、不安になつた由美さんはあなたの会社に電話したんです。

それは気の毒でみていられませんでしたよ。」

そりやそりやそうだらう・・・なんてことだ・・・

「俺は、これから・・・」

「そうです。私がご案内します。」

下では由美が泣いている。百合子さんが怒りながら泣いている。

「うひして俺は天国に導かれ、星となつて由美を見守る」ととなつた。

・  
とは程遠い、とんでもない死後を送ることになつたのだ。

「いいで、話を整理しておいで。」

俺は愛する女性に「まー」というなんとも間の抜けた呼び名で呼ばれている、いや、いた男だ。

名前は丸山雅夫で、やたら「まー」が多いのでやうなった。で、年齢は50歳。

なんや、おひさんやないか、と読むのをやめる読者がいるかも知れないが、

少し待つてほしい。

彼女、つまり由美だが、出会いは36年前に遡る。

中学1年、電車やバスは大人料金だが、まだまだ子供の頃だ。

俺が最初に彼女を意識したのは、彼女の声だった。

「皆さん、今日はサイモン&ガーファンクルのレコードをかけます

」

そう、彼女の声は昼休みに放送室から流れてきた。皆、弁当を食べるのと、じやべるのに忙しくて聞いてはいなかった。

でも、俺にはなんとも心地よい声だった。

どんな子なんやろ・・・

「あれ、しゃべってんの誰や?」

「え、2組の上田やろ。あいつバレー部やのに出たがりやで」

そういう悪意に満ちた中傷は聞き流し、「上田」という名前だけすぐ覚えた。

ただ、それだけだったのだが、ある日のこと、

「丸山くん」と呼びかけられたのだ。あの声で。

振り向くと彼女がいたのだ。顔を見たのは初めてだったのだが素敵なかほりだった。

「な、なに? なんで俺のこと知ってるの?」

「知ってるよ。バスケ部やる？」

「ああ」そう、俺は背が高い方だつたこともあり、バスケ部にいた。  
「私、バレー部やから、いつも体育館のロッカーで着替えしてるから  
時々見てたもん」

「そりなんや。」納得。

「で、何で声かけてくれたんやろ？」

「でさ、クラシック好きなんやろ？」

「え？ 何で知つてんの？」中学一年でクラシック好きなんて、あ  
んまり人に言えない。

「うん、鈴本先生に聞いたんよ。でさ、モーツアルトのレコード、  
今度流すから

貸してくれへんかな」

「そういうことか。

「ああ、ええよ。なんでもええんかな？」

「40番の交響曲？きれいなんやろ？」

「ああ、そやね。明日持つてきたりええんかな」

「うん。お願ひ。昼休みに放送室に持つてきてくれる？」

「わかった」

それが出会いだった。

次の日、放送室にレコードをいそいそと持つて行つた。

それから、時々昼休みに話すようになり、距離が近づいていった。  
クラスが違うので、その頃はやつていて交換日記をはじめた。  
携帯もない時代やからね。

しかし、そんな可愛い交際は長続きしなかつた。  
ま、俺が子供すぎたのだ。

高校は別々になり、そのまま会つこともなく別々の人生を歩いてきた。

お互に結婚も経験したが、うまくいかず、一人となつていた。

そこでよくある話と一緒にされると心外なのだが、48歳の時に中

学の同窓会で

再会したのだ。

俺は長く関西を離れていて、一人になつて戻つてきて半年ほど経つた頃だった。

彼女はずっと神戸にいたようだ。

彼女に会つた瞬間、30年以上の隔たりが一瞬にして消えたような気がしていた。

もちろん、俺の一方的な感情だった。

それでも、幸せな気分になれた。

その日から、彼女が心から離れなくなつていて。

とはいいうものの、いかんともしがたく、勝手に片思いを楽しんでた。

ところが、気まぐれでいたずらな神様がいたもんだ。

同窓会から1ヶ月近くたつてから、突然彼女から電話があつたのだ。

それからお互いの状況がわかり、よく会つようになり、昔果たせなかつた

告白をし、結婚を約束するまでに近づけていたのだ。

ところが・・・

俺は死んでしまつたのだ。

来年にはようやく結婚できるという時にだ。

こんな、ひどい話ないよなあ。

何で、再会させたんだよ。何で、恋に落としたんだよ。

何で、告白させたんだよ。気まぐれにもほどがあるぞ、神様。

「神様、なんて、様なんてつけるからですよ

突然、黒服の男が口を開いた。

俺の考えることわからんのか。さすがやな。

「じゃなに、普通の人なの?」

「そうですよ。上の世界も地上と変わりませんよ。

社長と社員みたいなもんです。」

「そりなんや。なら、下界のことを邪魔すんなつて。」

「仕事ですか？」

「で、俺は行くしかないのか・・・？」

「そうですねえ。残念ですが」

見下ろすと、由美が泣いている。

悔しいやら切ないやら申し訳ないやら、胸が張り裂けるようだ。

しかし、黒服の男に引っ張られ、葬儀会場の前に停まっていた黒いタクシーに乗った。

そこからはよく覚えていない。

気がつくと、東京都庁を思わせるようなビルの前に車は着いていた。

「でかいな」

俺は思わずつぶやいた。

「こつちは人口が増えるばかりですから」

黒服がすかさず答える。

「そうか・・・こつちでは人が亡くなつて人口が減ることがないもんな」

「いや、そういうわけでもないんです。」

「？じや、こつちでも寿命があるのか？」

「いや、そういうわけでもないんです。」

そのまま続きをあるのかと、待っていたがそれ以上何も言つてくれないので

文句を言おうとしたが、ロビーの受付みたいな所に来てしまつていた。

そこには、受付嬢があり、

「ようこそ」などと言つ。

まるつきり下界と同じだ。

「こちに名前を書いて下さい。」

差し出されたペンを受け取り、分厚いノートに名前を書く。妙な感じだ。

知つた名前がないか、ページをめくつてみようかと思つたがすぐに閉じられてしまった。

「ここでは、個人情報保護が下界よりも厳しく徹底されております」黒服が表情を変えずに言つた。

「へえ。 そなんや。」

それより、次の展開だ。

「これから俺はどうなるんですか？」

おずおずと尋ねると、べもない。

「来ればわかります。」

「おたくね、もう少し死人に優しくできないかな」

「いちいち優しくしてたら仕事が滞りますので。」

「ビジネスライクにさせて頂いています。」

「はあ。そうですか。」

とか何とか言つてゐるうちに、受付を離れて4階に上がる。

もちろんエレベーターだ。

「やつぱり、4階なんや。」

「何がですか？」

黒服の表情に少し変化があつた。

「いや、死人が行くんで、4階」

黒服が鼻で笑つた。

「やつぱり、あなたも同じ」と言いますね」

少し悔しい。で、気を取り直してもう一度尋ねた。

「これからなにがあるんですか？」

今度は答えてくれた。

「面接です」

「誰と？」

「移民局です。」

「俺は移民なんですか」

「そういうことです。」

「これからあなたが、どこに住み、どんな仕事をし、その結果どう生まれ変わらるのかを

説明されるのです。」

生まれ変わる？

「生まれ変われるんですか？ほんまにあるんや」

少し黒服の口の端があがつた。

「あるんですよ。うれしいですか？」

「いや、うれしいというか微妙な感じですけどね。」

でも、とりあえずまた戻れるんですよね。」

黒服の口の端がさらりとあがつた。

「戻れますよ。さあ、着きました。

このまままっすぐに廊下を行きますと、ドアが一つあります。

あなたは、その右側のドアを開いて中にお入り下さい。

面接官がいますので。では。」

黒服はそのままエレベーターからもおらずに、そのまま1階に下りて行つてしまつた。

仕方ないので、言われた通り、廊下を歩いて右側のドアを開いた。真っ白な壁と床のこじんまりとした部屋だった。

そこには向かい合わせで座るよう机と椅子があり、向こう側に面接官が座っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1304e/>

---

最後には愛が勝つ？

2011年1月2日02時41分発行